

ハイデルベルク信仰問答講義解説教33「神の栄光のために」(2012年4月22日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主は言われた。「この民は、口でわたしに近づき／唇でわたしを敬うが／心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを畏れ敬うとしても／それは人間の戒めを覚え込んだからだ。それゆえ、見よ、わたしは再び／驚くべき業を重ねて、この民を驚かす。賢者の知恵は滅び／聡明な者の分別は隠される。」災いだ、主を避けてその謀を深く隠す者は、彼らの業は闇の中にある。彼らは言う。「誰が我らを見るのか／誰が我らに気づくのか」と。お前たちはなんとゆがんでいることか。陶工が粘土と同じに見なされるのか。造られた者が、造った者に言うのか／「彼がわたしを造ったのではない」と。陶器が、陶工に言うのか／「彼には分別がない」と。(イザヤ29:13-16)

そこで、わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。そして、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけてとどまることを知りません。しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだのではありません。キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずで。だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かって古くの人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に付け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにならなければなりません。(エフェソ4:17-24)

【説教】

1517年、マルチン・ルターが『95か条の埤題』を出して、彼自身も属していましたローマカトリック教会に対して問題提起をしたことは有名です。そこから改革運動が一気に広まっていくことになりました。言わばこの問題提起がわたしたちプロテスタント教会の原点となっていると言うこともできます。この『95か条の埤題』の最初の言葉はこのような言葉です。

「われらの主にして師であるイエス・キリストが『汝ら悔い改めよ』と言われた時、それによってかれは、信じる者の全生涯が悔い改めであるべきことを欲しておられたのである」

ここに有名なルターの「生涯悔い改め」という言葉が出てきます。実はこの『95か条の埤題』はこれ以降も繰り返して、悔い改めを要求する内容となります。この『95か条の埤題』は正式には『贖宥の効力を明らかにするための討論』と言います。「贖宥」というのは、人間の罪の償いに関して、これを聖人の功績によって軽減したり、お金で免除したりすることを言います。あの免罪符というのは、そういう贖宥の一つの方法でした。それを買うことによって罪が軽減されるというのです。

ルターは、これでは本当の悔い改めにならないと、この贖宥の制度を批判します。確かにそうです。札を買えば罪が赦されるということになれば、人間が心から罪を悔い、神さまに赦しを請うことにはなりません。それより、そういうもので罪が軽減されるならば、キリストの十字架のあがない、罪の赦しは一体どうなるのか。神の独り子の命がささげられたのです。それがどうしてお金で解決できるようなことにすり替わってしまうのか。それではこのせつかくの神さまの救いを軽んじることになるのではないかと。それがルターの批判の中心です。

それゆえに、わたしたちがもしこの絶大な恵みに対して応えることができるとすれば、それは全生涯をささげることなくしてはあり得ないことなのです。全生涯をささげる、それでも足りない。それだけ大きな救いが行われた。神の子の命がささげられたのです。ルターの「生涯悔い改め」という言葉の背後には、まさしくこの神さまの恵みに対して、わたしたちがどのようにして誠実に応えるべきかという問いかけが含まれているように思います。それはわたしたちがよく考えなければなりません。

わたしたちは悔い改めをどのように考えているでしょうか。もしわたしたちがそれを表面的な、取って付けたような、間に合わせのものと何とかしようと考えているのであれば、それはあのカトリック教会の間違い、免罪符と全く同じ間違いをしていることとなります。例えば、少しでも生活習慣を改善すると

か、少しでも趣味や娯楽を我慢するとか、それで何か罪が解決された、自分が悔い改めたと考えるならば、それは大きな間違いです。それでは本当の意味で悔い改めることにはなりません。

あるいは、ここは気をつけていただきたいのですが、中には熱心な人がいて、例えば旧約聖書の律法に記されているような生活、またよく書簡にあるような徳目を一生懸命生きようと努力することで悔い改めを表そうとする人もいるかもしれません。それは一見、熱心であり、悔い改めに生きているように見えるかもしれない。しかしもしそれが自分を強いて、そうさせているならば、それは本当の意味で悔い改めたことにはなりません。それはまだ悔い改めているふりをしているに過ぎないのです。

悔い改めに生きることと悔い改めを装うことは違います。それは自分で一生懸命努力して達成できるような類いのものではありません。自分の外側ではなく、内側から起こさなければなりません。ですから取って付けたような、表面的なものではない。心の底からそうなる。それが信仰生活です。

信仰生活は、わたしたちの生き方、生活のスタイルが少し変わったというものではない。その程度の変化ではない。もっとすごいことがこのわたしの中で起こっている。それが今日の信仰問答で伝えているところです。ここが分からないと、このあと、十戒や主の祈りが出てきますが、律法や祈りがただの義務になってしまう。感謝にならない。あるいはこれをすれば救われるかのような捉え方をしてしまう。自分の外側のこと。取って付けたようなものになってしまう。そうならないように、信仰問答はここでわたしたちの信仰生活について、その根本のところを教えています。

問88-90まで読みます。信仰問答は、悔い改め、回心について、ここで二つのことを示します。それはすなわち「古い人の死滅」と「新しい人の復活」であります。ここで何よりもわたしたちが心に留めておきたいことは、洗礼を受けてキリストに結ばれることです。この問88の根拠となる聖書の御言葉にローマの信徒への手紙第6章のところがあります。6:1-5を読みましょう。わたしたちは洗礼を受けてキリストに結ばれることによって、キリストの十字架と復活の御業に与るので。つまりキリストが死んでよみがえったように、この罪の自分が死に、新しい命によみがえらる。それはもはや罪の自分ではなく、新しい自分、神さまとの関係を回復した自分です。

それまでは、神さまと断絶していた自分でありました。そこに罪の人間の悲愴があります。わたしたちはそれが人間であつ

て仕方がない考えるかもしれません。しかしそうではありません。罪の状態、それは人間として極めて不自然なのです。本当の自分を失っているのです。でもそのような悲慘の中に生きていた自分が死ぬ。そして新しい自分がよみがえる。それは神さまが人間を造られた時の、あの「極めて良かった」と祝福された人間です。あの神にかたどって造られた神のかたちとしての人間。その祝福された人間として自分がよみがえる。立ち上がる。キリストは十字架と復活の御業を通して、わたしたちをそのように新しく造り変えてくださいました。そこにしか真の悔い改めはありません。それは生活を少し変えるとか、そういうものではありません。全く新しい自分の始まりです。そこそここの生涯をかけて、キリストと共に罪に死に、キリストと共によみがえりの命を生きる。そういう新しい自分が始まったのです。

今日は、エフェソの信徒への手紙を読みました。4：22以下を読みます。「心の底から新たにされて」とあります。それは外側だけの变化ではなく、内側からの变化です。ですから今日の信仰問答、問89、90でも「心から」とあります。表面的に装うのではない。罪に死んだ人間は心から罪を嘆き、それを憎み避けるようになる。あきらめたり、妥協したりしない。心から罪を悲しむ。そしてキリストのよみがえりの命に生かされた者は、心から神を喜び、あらゆる善い行いに心を打ち込んで生かすことができる。心の底からそれを行うことができる。わたしではない。わたしの中に生きておられるキリストがそうさせるのです。パウロが「生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ2：20)と述べている心境はまさにキリストとの一体化の中で、その新しい命に突き動かされているところに起こされたものでしょう。それが悔い改めなのです。

さて、そのような悔い改めは、自分を強いて善い行いをするようなものとは全く違います。内側からキリストのよみがえりの命によって突き動かされるものなのです。それがどういふものか。問91を読みましょう。もはや、わたしの思い、人間の定めではない。純粋に信仰から湧き起こってくるもの、具体的には御言葉に従うものです。このあと十戒が出てきますが、自分を強いてこの戒めを守るのではない。心から喜んで神さまの戒めを守る。全生涯が感謝の生活として、神さまの栄光を表すものとなります。そこには自分を誇る思いはありません。自分の熱心さや、信仰深さを他者に示すようなものにはなりません。そのような思いは微塵もないのです。ただ恵みによってわたしを罪から立ち上がらせてくださった神さまの御業をたたえ、喜ぶものになります。その動機しかない。

そう言っても、わたしたちが善い行いをする時に、少しの私心も挟まないというのは難しいことです。どんなに神さまの栄光のためと考えても、どこかで自分を誇り、見返りを求める気持ちが出て来ってしまうものです。それは未だ完成していない罪の支配の残る地上の歩みにおいては必ずわたしたちの前に立ちはだかる壁です。でもだからこそルターが言ったように、生涯悔い改めていくものなのではないか。生涯をかけて罪と戦うのです。洗礼を受けた日から、そのような生き方ができるのではない。そういう生き方ができるようにわたしの中にキリストの命が始まったのです。

肝心なことは、もはやわたしたちは罪に支配されることにはないということです。罪に打ち勝ち勝利されたキリストが共におられるのです。支配されるのではなく、キリストの勝利を信じてこれと戦い続ける。ただ神さまの栄光のためだけに生きるわたしが始まっていることは事実なのです。そのわたしがわたしの中に生きているからあきらめないで今日も神さまの栄光のためにささげようと決心するのです。

今日はルターで始まったので、最後にルターを引用しましょう。『小教理問答』という子ども向けの信仰問答があります。ハイデルベルクと同じように十戒や主の祈りもありますし、また洗礼や聖餐のことを子どもに分かりやすく教えるような内容で

す。必ず章の見出しのところに「お父さんは家の人たちにこれをいかにやさしく教えるべきか」と記されます。洗礼の意味を子どもに教える中にこうあります。「水の洗礼ってどういう意味なの？それは、わたしたちの中にある古いアダム(人間)が、毎日の悔い改めを通して溺れて、すべての罪と悪い欲もろとも死んでしまい、逆に、義ときよさをもって神さまのまえに永遠に生きる新しい人間が毎日現れて、よみがえることを意味するのさ」

日々、わたしの中にこのことが起こっている。信仰問答でも洗礼のところ問70で「次第次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩むためのです」そのようにわたしは確実に日々新しくされるのです。聖化されていくのです。あきらめてはいけません。「どうせ」という言葉は相応しくありません。日々キリストの命を感じつつ、この恵みに全生涯をささげていきましょう。祈りをささげます。